愛・地球博
EXPO 2005 AICHI JAPAN

夏

暑さ対策も万全

「自然の叡智（えいち）」をテーマに愛知県で開催中の愛知万博（愛・地球博）が、夏休みの子供連れ家族らでにぎわっている。開幕以来、会場を訪れたのは約1300万人。会期中（9月25日まで）の当初目標、1500万人に迫ってきた。真夏の暑さ対策に、霧の噴射や日陰の確保など工夫をこらす万博協会。広報プロデューサー、マリ・クリスティーヌさんにインタビューした。

自分なりの「外国再発見」を

広報プロデューサー マリ・クリスティーヌさん

東京都生まれ。外国生活を経験後、上智大国際学部に入学し、在学中に芸能活動を開始。東京工大大学院では社会工学を専攻して修士課程修了。数カ国語に精通し、国際会議などの司会や講演を行っている。異文化コミュニケーター。国連ハビタット（人間居住計画）親善大使。

――愛知万博も残り二カ月を切りました。入場者は目標を大きく超えそうな勢いですが、今の感想をお聞かせください

「千五百万人というのが最初の目標でしたから、前半の好調な入場者数はすごくうれしいです」

「プロデューサーに任命され、初めて名古屋に来たときは、全然盛り上がりがなく『えっ、本当にやるの』って感じでした。全国を回って何千枚もの名刺を渡しましたが、関西では相手にされないし、東京では『地方博でしょ』って、人ごとのようにいわれるし、とにかく大変でした」

――広報責任者として一番苦労されたのは、どのような点ですか

「私の仕事は『どうしたら愛知万博を知っていただき、会場まで足を運んでいただけるか』ということ。とくに、来場者の一割は海外から来ていただくということで、最初は、海外広報が活動の中心になりました」

「外国の人たちは、二三年前に長期バカンスの計画を立てます。直前の情報では動いてもらえないため、就任直後に活動を始めたのですが、広報の材料が少なくて苦労しました。とりあえず、子供たちを通じ家族の話題になるよう、愛知万博の公式キャラクターを主人公にした絵画コンテスト『モリゾー&キッコロ100の世界』を発信しました。子供たちの反響は大きく、日本を含め二十九カ国から約五千点の作品が集まり、各国の地元メディアにも大きく取り上げられました」

――"環境万博"といわれる愛知万博広報の反応はいかがでしたか

「最初に海外PRに出かけたのは、ヨハネスブルクの環境サミットでした。小泉純一郎首相も同席され、愛知万博の説明をしました。このとき、燃料電池車を初めて展示し、環境万博を訴えたのです。ヨーロッパの人たちは関心を持ち、メディアからもいい評価をいただきました」

――盛況の万博ですが、点数をつけると何点。理由は何ですか

「百点満点です。理由の一つは、会社のような組織ではない集団が短期間でこれだけの成果を出せたということです」

「もう一つは、愛知を中心にした地元の盛り上げ方の素晴らしさです。最初、低調さを心配したとき、ある人から『名古屋は直前にならないと盛り上がらないから』といわれましたが、名古屋に生活拠点を移し、そのことを実感しました。町内会単位でチケットを購入する地区などもあり、"地区愛"というか、万博を成功させたいという気持ちで地域がまとまっていたのです。言葉では、目標入場者の達成が成功ということになるのでしょうが、心に残る影響力では、それ以上のものといえるでしょう」

――これまで印象に残るようなことはありましたか

「愛知県が実施している『一市町村一国プレンドシップ事業』です。県内七十一の自治体が、万博に出展している海外百二十の国を応援し、交流を深めていることです。先日も、半田市民約二千人がブータンのナショナルデーに駆けつけていました。ブータンの人にしてみれば、日本の人たちから手厚い"もてなし"を受けたと感じるでしょう。展示や催しとは別の、もっと大きな感動が双方の心に残ることでしょう。これこそ文化外交だと思うんです」

――開幕前、子供たちが夢を持ち、それを実現する万博にしたいとおっしゃっていましたが

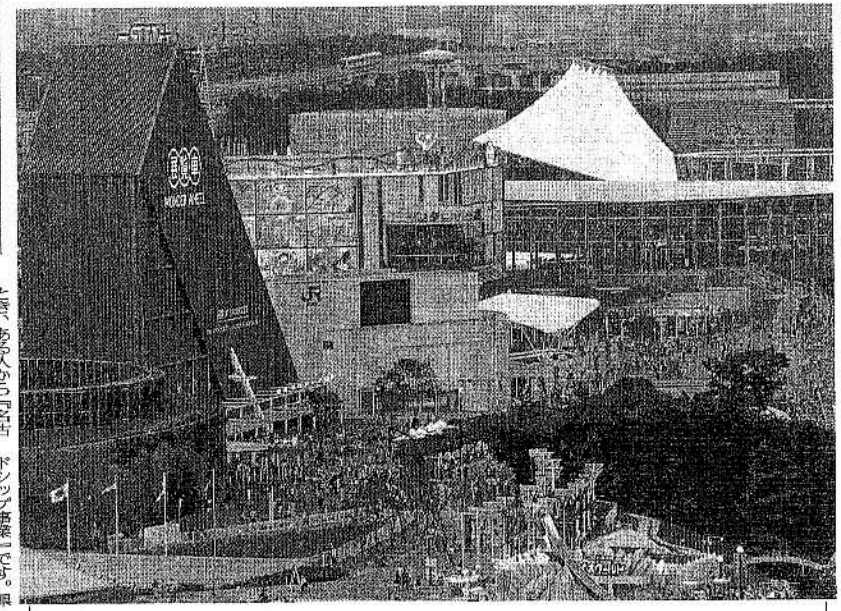
「愛知万博では、マンモスやロボット、『サツキとメイの家』など、子供たちが感動する展示やイベントがたくさんあります。大阪万博で、月の石を見た子供たちが『いつか自分も月に行けるんだ』と夢を抱いたように、会場を訪れた子供たちも、世界がもっと身近な存在になり、いろんな夢を膨らませていると思います」

――マリさんのお勧めスポットはどこですか

「『愛知万博発祥の地』『海上の森』が近くにある瀬戸会場です。万博の魂ともいえる場所で、私の大好きなところです。ここには、市民参加のプロジェクトが集中しています。テーマは『盆栽から戦争まで』。盆栽は一番小さな宇宙ですし、戦争は多くの人を殺し、自然を荒廃させる一番大きな環境破壊でもあるわけです。あんなに美しかったアフガニスタンが、今では砂漠化しています。平和を語ることが環境保全の一つでもあると思うんです」

――夏休みに入り、家族連れも増えてきました。最後に楽しい会場の回り方を教えてください

「私は、この万博を『安全でおいしいとご取り』の世界旅行だと考えています。各国が、文化であったり環境であったり技術であったり食であったりして、その国の一番いいところを紹介しているのですから。それぞれが、自分にとっての『外国再発見の旅』をするのも面白いと思います。それと外国の方に『Have a nice day（いい一日を）』などと気楽に声をかけてあげてください」



幻想的「夢の世界」 来場者は1300万人

愛知万博長久手会場。世界121カ国が出展している21世紀初の本格万博。繭の形をした日本館、富士山形の「夢見る山」、屋根に植えた植物が緑色を濃くした三菱未来館、円盤を思わすEXPOドーム、69の外国パビリオンがある6つのコモン…。キラキラ光るライトの間に人、人、人。楽しそうな声やにぎやかな音楽が空まで響く